

平成 22 年 3 月 31日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007～2009

課題番号：19791785

研究課題名 (和文) 市民との協働による健康支援ボランティア教育プログラムの開発

研究課題名 (英文) Development of Health Promotion and Education Program for a health supporting Volunteer through the Citizen Participation

研究代表者

大久保 菜穂子 (OKUBO NAOKO)

日本伝統医療科学大学院大学 統合医療研究科 准教授

研究者番号：80317495

研究成果の概要 (和文)：本研究の目的は、市民と専門職が協働し、健康支援ボランティアの教育プログラムを開発することである。方法は、5つのステップ (1.文献検討、2.ヒアリング調査、3.教育プログラムの試案を作成・実施・評価、4.教育プログラムの作成・実施・評価、5.分析とまとめ)で行われた。その結果、市民と専門職のニーズを反映したプログラムが開発され、86%の講座修了者が健康支援ボランティアとして活動を始めた。

研究成果の概要 (英文)：The purpose of this study is to develop the health promotion and education program for health supporting volunteer through the Citizen Participation. It was 5steps ( 1.Literature review, 2.Interviews, 3.Making a tentative planning of the health education program, 4.Plan-Do-See of a health promotion and education program, 5.Analysis and Summary) The results of this study, 86% of participants in this program began to start on activities of health supporting volunteer.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	0	1,200,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	600,000	3,800,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学 地域・老年看護学

キーワード：健康 教育プログラム ヘルスプロモーション 市民との協働 ボランティア

## 1. 研究開始当初の背景

わが国においては、21世紀における健康戦略として「健康日本21」が提案され、全ての人々のQOLの向上を目的とした健康づくりが展開されている。この目的を達成するために、WHOが提唱するヘルスプロモーション

の理念に基づく健康づくり戦略がとられている。その戦略とは、主体的に生活習慣を改善するといった健康づくりに取り組み、QOLを向上しようとする個人の力を教育的支援(健康教育)によって培うと共に、社会全体としても個人の主体的な健康づくりを

支援していく環境を整備することである。

A看護大学では、ヘルスプロモーションの理念に基づき、個人の主体的な健康づくりの支援のために環境を整備し、看護職を始めとする保健医療専門職が市民向けに健康相談、健康情報の場を開設した。その結果、開設年度(2004年度)は相談者数 237 人、相談件数 360 件であった。さらに 2005 年度は相談者数 838 人(前年比 3.5 倍)、相談件数 1150 件(3.2 倍)と増加した。このことから、来訪者の増加傾向やリピーターの存在からも、看護大学が市民に提供する健康相談の活動が、市民のニーズに適応していることが推察できる。今後、ますます相談者及び相談件数は増加することが予測されるが、現在、非常勤のコーディネーター(看護師・図書館司書)及びボランティア(看護師・保健師・栄養士ら保健医療専門職)の少人数で運営している。そのため、この場の目的である「主体的に健康生活を創り、自分の健康を自分で守る市民社会をめざして、必要な健康情報を得る方法ならびに、健康情報の使い方に関して情報を提供する」ために市民ボランティアの参加が早急に望まれる。

市民がボランティアとして活動する際には、まず始めに活動の場の理念やボランティアの要件を認識し、活動のスキル等を習得することを目的とした教育プログラムを受講することが必要である。さらに、プログラムの教育内容の選定にあたっては、既存の専門職ボランティアらのニーズ及び、利用者側である市民のニーズを把握することが重要である。しかし、たいいていの教育プログラムは専門職側のニーズアセスメントのみに留まっていることが現状である。

## 2. 研究の目的

本研究は、市民と専門職が協働し、市民が主体的に健康生活を創り、自分の健康を自分で守ることをサポートする健康支援ボランティアの教育プログラムの開発を目的とする。

本研究は、看護大学内の地域に開かれた場(健康相談・健康情報コーナー)でボランティアとして活動しようとする市民を対象として、専門職と市民との協働によるボランティア教育プログラムを開発しようとするものである。ここでいう専門職と市民とは、活動中のコーディネーター及びボランティアである保健医療専門職と、健康に興味関心があり、ボランティアとして活動を希望する市民のことをいう。また、専門職と市民との協働とは、両者に対し、ボランティア活動に関する認識、要件などを理解した上で、各々のニーズを把握し、プログラムの構成要素を抽出し、教育内容に組み込むといった、プログラムを共に作成・実施・評価するプロセスを

いう。

3年間の研究期間において、まず最初の1年半では国内及び国外における教育プログラムの現状を概観し、試案を作成する。その後の1年半で看護大学においてボランティア活動希望の市民に対してこのプログラムを試行し、その研究成果によってプログラムの評価を行うこととする。

## 3. 研究の方法

本研究の全体の計画(流れ)

2007年度	(1)健康支援ボランティア育成に関する文献検討 (2)ヒアリング調査
2008年度	(3)教育プログラムの試案を作成・実施・評価
2009年度	(4)教育プログラムの作成・実施・評価 (5)分析とまとめ

[2007年度]

(1)健康支援ボランティア育成に関する文献検討：健康支援ボランティアの教育プログラムを考案するために、国内外におけるボランティア教育に関する研究論文・教材・ガイドラインなどの文献を検索・考証し、プログラムの構成要素の抽出および教材開発の参考にする。

(2)健康支援ボランティアに関するヒアリング調査：効果的な教育プログラムを考案するために、ボランティア活動に従事する市民および専門職に対し、ボランティア活動に関する認識、要件などを理解し、プログラムの構成要素を抽出する。

①対象：ボランティア活動に従事する市民およびボランティア育成プログラムの企画運営者である専門職(看護師ら)を対象とする。研究目的を説明し、研究参加の同意を得られた者とする。なお、市民と専門職は別々に実施する。

②データ収集方法：非構成的面接を行い、ボランティアに関心のある市民に対しては、ボランティア活動に関する認識、活動の実現可能性の有無、実施容易あるいは困難な背景、ボランティア活動を行うにあたり習得しておきたいこと等といったニーズを自由に語ってもらう。また、専門職に対しては、健康支援ボランティア教育のあり方、ボランティア活動に関する要件について語ってもらう。面接の際には逐語データを得るために、情報提供者に録音についての許可を得て、I C

(MD) レコーダーを用いて録音させてもらう。録音した内容は逐語録におこす。

③分析方法：得られたデータは、内容分析手法を用いて質的記述分析を行う。分析した内容から健康支援ボランティアのための教育プログラムの構成要素を抽出する。

[2008年度]

(3)健康支援ボランティアのための教育プログラムの考案(試案の計画・実施・評価)：前年度に行った文献検討およびヒアリング調査を基盤にして、健康支援ボランティアのための教育プログラムを考案し、試案を実施し評価する。評価にあたっては、プログラム前後(1回目開始前および4回目終了時)に、任意による無記名式のアンケート調査を実施し、その場で回収した。なお、試案作成に関しては、市民と協働して行い、より市民の関心が高まるような、かつ実行可能な内容にする。

[2009年度]

(4)健康支援ボランティアのための教育プログラムの実施と評価：前年度に引き続き、研究協力が得られる市民及び専門職を対象に、考案したプログラムおよびパンフレットを用いて研究代表者・協力者およびボランティアに関心のある市民と協働して実施し、評価する。

(5)分析とまとめ：得られたデータは統計解析ソフトSPSSを用いて分析し、分析結果からプログラムの内容とその効果を検討して課題などをまとめる。

#### 4. 研究成果

(1)健康支援ボランティア育成に関する文献検討：はじめに「ボランティア」、「マネジメント」を含んだ文献を抽出した。さらに、「マネジメント」については、「非営利組織・ボランティア」を含んだ文献を抽出した。文献収集はこれらの資料を多数保管している東京ボランティア・市民活動センターの資料を用いた。また、日本社会学会で収録している社会学文献情報データベースからの収集もあわせて実施した。この結果47の文献を絞り込み、「ボランティア」、「ボランティアマネジメントのアウトカム」についてまとめた。文献検討の結果、①ボランティアは「ボランティアリズム＝自発性、無償性、利他性、先駆性」という理念をもって行動する、②ボランティア組織はアソシエーションの要素が強いため、中心にリーダーシップを取る者をおくことで機能する、③組織行動の異なるボランティア組織の場合は、その特徴に考慮したマネジメント手法が求められる、ということが明らかとなった。

(2)健康支援ボランティアに関するヒアリング調査：Stanford University Medical Centerにおいて、ボランティア育成プログラムの企画運営者(看護師ら専門職)に対してヒアリングを行った。

その結果、特に「ボランティアに対する初めの動機付けの大切さ(効果的な教育プログラムの展開の重要性)」と「ボランティア活動の継続に向けての個々のボランティアへの働きかけの大切さ」についての情報を得た。

また、活動に従事するボランティア(市民)に対してもヒアリングを行った。その結果、プログラムの構成要素として、「健康に関する概論(ヘルスプロモーションについて)」、「ボランティアに関する概論」、「こころの健康に関して」、「身体的健康に関して」があげられた。

(3)健康支援ボランティアのための教育プログラムの考案(試案の計画・実施・評価)

##### ①倫理的配慮

調査はA大学研究倫理審査委員会の承認(承認番号08-046)を得て実施した。また、当該施設の全活動は研究に使用することが館内に掲示されている。さらに、提出は自由意思とした。

##### ②周知方法

ポスター及びチラシを作成し、A大学内市民向けコーナーに配置し、学内ホームページ上や後援を得た社会福祉協議会の広報誌を通して希望者を広く募集した。その結果、定員30人に対し37人の応募があり本教育プログラムに対する市民の関心の高さがうかがえた。

##### ③対象者の属性

受講者32人のうち全回出席した25人の協力を得た。回答者の年代は60代が35.5%と最も多く、全員女性で「主婦」が47.7%と最も多かった。

##### ④教育内容について

9割以上が教育内容に満足し、理解できたと感じ、特に1回目の講座「健康に関する概論」が最も印象に残ったと回答した。

##### ⑤プログラム全般について

9割以上が本教育プログラムは有意義であり、今後のボランティア活動に役立つと感じ、講座に参加しボランティアへの活動意欲が参加前よりも高まったと回答した。

##### ⑥自由記述

教育内容の展開方法について「内容IVと内容Iの順番を入れ替える(身体的、精神的、社会的健康という順番)と自らの問題として、より一層身近なものになると思いました。」や、「お年寄りと接するボランティアをしているが、受講し、人との接し方がよくわかった。」といった意見が挙げられた。今後、効果的なプログラム開発に向け教育内容や運

営条件等、受講者の意見を反映し計画者ら運営スタッフと検討を行い、市民の関心が高まる展開方法を検討していくこととした。

(4) 健康支援ボランティアのための教育プログラムの実施と評価：試案したプログラムを行った結果、自由記述においてWHOの健康定義をふまえた教育内容の展開方法に関する意見があがった。これらの受講者である市民の意見を反映し、計画者ら運営スタッフと共に教育内容や運営条件等の検討を行い、効果的な教育プログラム開発を行った。評価として、プログラム前後（1回目開始前および4回目終了時）に、任意による無記名式のアンケート調査を実施し、その場で回収した。また、受講後のボランティア活動への参加についての追跡調査を行った。

#### ①倫理的配慮

調査はA大学研究倫理審査委員会の承認（承認番号09-1003）を得て実施した。また、当該施設の全活動は研究に使用することが館内に掲示されている。さらに、提出は自由意思とした。

#### ②周知方法

ポスター及びチラシを作成し、A大学内市民向けコーナーに配置し、学内ホームページ上や後援を得た社会福祉協議会の広報誌を通して希望者を広く募集した。その結果、定員30人に対し33人の応募があり本教育プログラムに対する市民の関心の高さがうかがえた。

#### ③対象者の属性

受講者31人のうち全回出席した22人の協力を得た。回答者の年代は60代が58.6%と最も多く、男性20.7%、女性79.3%であった。また、図1の通り「主婦」が51.5%と最も多く、次いで「会社員」15.2%であった。（図1対象者の属性）

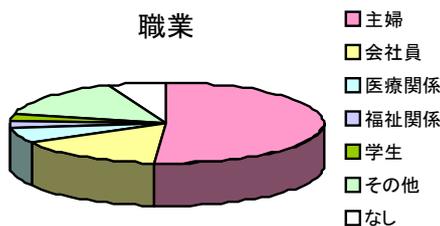


図1 対象者の属性

#### ④教育内容について

本講座は、以下の通り4つの教育内容によって展開した。[内容Ⅰ. ボランティアに関する概論「ボランティアを考える」、内容Ⅱ. 身体的健康について「自分のからだ、自分でする健康チェック」、内容Ⅲ. 精神・心理的健康について「話の聴き方・話し方」内容Ⅳ. 健康に関する概論「健康なまちづく

り～健康社会学的視点から～]

その結果、プログラム修了後のアンケート調査において、全員が教育内容に満足し、理解できたと回答した。中でも図2の通り、特に4回目の講座「健康に関する概論」が最も印象に残ったと約半数が回答した。（図2教育内容に関して）

これは、前項（3）健康支援ボランティアのための教育プログラムの考案（試案の計画・実施・評価）の④でも同様の結果が得られていたことから、健康支援ボランティアになろうとする市民の健康に関する学習ニーズの高さが窺えた。

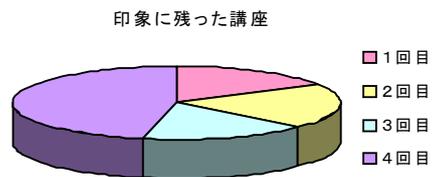


図2 教育内容に関して

#### ⑤プログラム全般について

図3の通り9割以上が、講座を開催する時間帯や、曜日、会場についてもよかったと回答した。全員が本教育プログラムは有意義であると回答し、9割以上が今後のボランティア活動に役立つと感じ、講座に参加しボランティアへの活動意欲が参加前よりも高まったと回答した。（図3運営条件に関して）

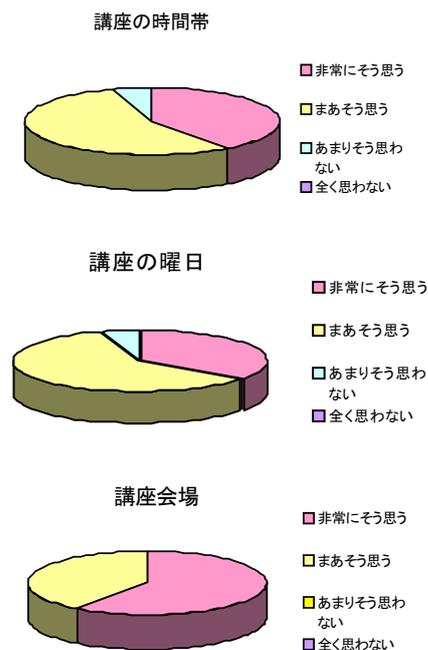


図3 運営条件に関して

## ⑥自由記述

「健康やボランティアについて考えるようになりよかった」、「ボランティアのことを体系的に学べました」、「健康やまわりの人や地域などについて考えるようになりました」という意見が挙げられた。

## ⑦追跡調査

全回出席の22人のうち、19人が実際にボランティア登録を行い、活動を始めた。すなわち86%の講座修了者が健康支援ボランティアとして活動を始めた。今後、本プログラム参加者のボランティアの継続性をフォローアップしていきたい。

### (5) 分析とまとめ

2008年度に行った前述の(3)健康支援ボランティアのための教育プログラムの考案(試案の計画・実施・評価)時および、2009年度に行った(4)健康支援ボランティアのための教育プログラムの実施と評価時のアンケート調査において、Rosenbergによるセルフエスティーム(self-esteem)尺度を行い、プログラムの事前、事後での平均得点を検討した。

その結果、図4の通り、プログラム修了後の方がプログラム開始前(事前)に比し、2008年度、2009年度のいずれも平均得点が増していることが明らかとなった。さらに、2008年度、2009年度を比較すると、平均得点が1点異なるものの、その後のプログラム修了時(事後)において、2.2点の差が確認できた。すなわち、2008年度の試案時よりも、2009年度の方が平均得点の上昇の割合が高かった。このことは、プログラムの運営条件や教育内容の改善が影響したことも考えられる。(図4 self-esteemの得点比較)

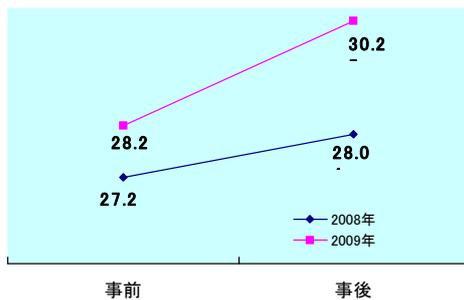


図4 self-esteemの得点比較

試案を経て確立したプログラムであったが、アンケート結果から、プログラム全般・教育内容共に概ね受講者の満足度が高かったことがうかがえた。また、自由記述において、「もっとボランティアについてディスカッションする機会やボランティア活動をしている方の話などもうかがいたかった」とい

う意見をふまえ、今後、効果的なプログラム開発に向け教育内容や運営条件等、さらなる検討を行い、よりよいプログラムの開発をめざす必要性が示唆された。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

NAOKO OKUBO, Michiko HISHINUMA, Keiko TAKAHASHI, Chikako UCHIDA, Michiko ISHIKAWA, Naoko MATSUMOTO, Kumi SUZUKI. Evaluation of Health Education Program for Active Citizens, Bulletin of St. Luke's College of Nursing, 34, 2008, 55-61

[学会発表] (計3件)

大久保 菜穂子、市民との協働による健康支援ボランティア教育プログラムの開発、第7回日本ヘルスプロモーション学会学術大会、平成21年12月6日、東洋大学(埼玉県)

Yamaoka E, Hishinuma M, Ishikawa M, Yamada M, Emiko O, Yoshida C, Takahashi K, Okubo N, Uchida C, Indo K, Sato K, Fujita J, Sato N. Visitor's Evaluation of a Nursing College's Health Consultation Service Activities for Citizens, The First Asia-Pacific Conference on Health Promotion and Education, 19<sup>th</sup> July, 2009 JAPAN

大久保 菜穂子、ヘルスプロモーションと健康教育、第6回日本ヘルスプロモーション学会学術大会シンポジウム、平成20年12月20日、茨城県立医療大学(茨城県)

[その他]

ホームページ等

<http://rcdnp.slcn.ac.jp/lukanavi/2009/07/post-d330.html>

<http://rcdnp.slcn.ac.jp/citizen/2/index.html>

<http://icube.sblo.jp/article/31957932.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大久保 菜穂子 (OKUBO NAOKO)

日本伝統医療科学大学院大学 統合医療研究科 准教授

研究者番号：80317495

(2)研究分担者 ( )

研究者番号：

(3)連携研究者 ( )

研究者番号：